書く指導は急いではいけない

漢字が読めて、それが何を意味しているかがわかるようになると、おとなのように、それを書いてみたいという気持ちが出てくることもありましょう。

石井方式では、“書く”ことはなるべく遅く教えることにしています。子供がすすんで書きたがるまでは書かせないことにしています。しかし、子供が、どうしても書きたがるようでしたら、書くのに任せて、黙って見守りましょう。

筆順はでたらめ、形もめちゃくちゃでしょうが、黙って見守っているのです。幼児の描く絵をご覧ください。体よりも大きな頭、ひどいのは、頭から手が出、足が出ています。手の指だって、三本、六本、その時の都合でどうにでもなります。

そういう絵を書く子供に対して、字だけうまく書けと要求したところで、それは無理というものです。時期がくれば、だれが教えなくてもだんだん整った絵を書くように、お化けのような字も、だんだん整った形になっていきます。

今の、文部省の指導方針では、漢字は“読む”ことと“書く”こととを同時に教え、同時にそれができるようになることを求めています。

石井方式では“読み先習”、書く学習はあとまわしにします。これは、国語審議会でも、石井方式を支持する委員と反対派の委員とで白熱的な論争があったと報道され、昭和四十四年四月二十二日の朝日新聞では、「漢字教育、どちらが有効か」という見出しで“論争”を掲げました。このことについては、別に述べたいと思います。

教わったばかりで、字形について認識が足りない時に漢字を書かせますと、一点一画ごとに、手本の漢字を見比べなければ書けません。

こんな学習を、何回繰り返したところで、書く力はできあがらない、というのが私の考えです。

書く指導は字形が思い浮かべられるようになってから行なう

漢字が読めて、意味もよくわかり、使い方もよくわかり、しかもたびたびそれを読む機会を重ねることにより、目をつむっても、その漢字の字形が頭にはっきりと思い浮かべられるようになってから、漢字を“書く”指導を始める。……これが石井方式です。

つまり、頭の中に書けるようになってから、それを紙に書くには、どこから、どういう順序で書くのかを教えるのです。

頭の中に書ける漢字ですから、一点一画、手本と見比べることもありません。一ぺんで正しく、美しく書けるようになります。

読み書き同時教育に比べて、なんと能率の良いことでしょう。同時教育では、なかなか書けるようにならないものですから、学校ではよく、「この字を十ぺん書きなさい。」とか、「ノートに一ページ練習してきなさい。」とか、漢字書き取り練習をよく宿題に出していますが、こんな学習をいくら繰り返しても、ほんとうの“書く力”はつきません。

赤ちゃんは、はいはいしている間に、手足の力を養い、やがて立って歩けるようになるのです。はいはいできないうちから、歩かせたところで、歩けるようにはなりません。それどころか、足が曲がってしまって、足の力が育ちにくくなります。

漢字も、読む学習を重ねている間に、字形の認識が深まり、それがやがて書く力になるのです。これを同時にさせている従来の学習法は“はいはい”と“あんよ”を同時にやらせる誤った教育法です。